

『小さな村の物語 イタリア』

松浦 俊博

毎週土曜の夕方六時から妻がテレビにかじりつく。2007年から続く、紀行・ドキュメンタリ番組の『小さな村の物語 イタリア』だ。娘がポストドク最初の仕事で、2009年から二年間イタリア北部トレントのECT*（欧州理論核物理研究センター）に滞在し、妻や私もイタリアに親近感を持つようになった。ちょうどその頃、この番組が始まった。人間本来の暮らしを美しい映像にした心温まる作品である。当初、スポンサーは私の出身である東芝単独で、「TOSHIBA presenta」のロゴを誇らしく思っていた。

毎回イタリアの田舎の小さな村をひとつ選び、そこで暮らす村人二人ほどを主人公にして彼らのありのままの日常を映す。個性派俳優・三上博史の語りも自然で良い。テーマ曲であるオルネラ・ヴァノーニの「逢いびき」も軽快で心地よい。340箇所を超える村を紹介し、日本にイタリアの伝統と文化を通して人々の哲学を伝え続けてきた功績により2018年イタリア共和国功労勲章を授与された。

番組のホームページから話を一つ紹介しよう。「イタリア中部マルケ州、見晴らしのよい丘の頂にある小さな村フォルチェ。伝統加工の技が守られており、あらゆる職人が腕ひとつで思い思いの人生を送っている。2016年の大地震で半数近くが村を離れたが、残った人々は力を合わせ遅く生きてきた。ミラノで自身のブランドを立ち上げ、大地震をきっかけにこの村に戻った洋裁師の女性。毎年ミラノでファッションショーを開催する売れっ子だ。村に戻ると決めたのは、故郷で過ごしてきた大切な記憶を失いたくなかったからだ。村に戻ってから自分のブランドのタグを「made in Marche（マルケ）」と変えた。この村から新しい文化を発信したいと決めた彼女の覚悟だ」

主人公たちが何気なく話す。「村には何もなければ、すべてがある。あせらずゆっくり進めばいい」
「気候や風土に生活リズムを合わせ、家族や友人を大切に心豊かに暮らす。『確かな幸せは日常に溢れている』。普段忘れていく『美しく生きる』ということが心に沁みてる。」